

研究ノート

ルーマンの経済システム論(続)*

春 日 淳 一

- I. ルーマン論文への批判と反論
- II. 経済システムにおける価格
- III. 市場について
- IV. 時代の診断としての経済システム論

I. ルーマン論文への批判と反論

前稿(「ルーマンの経済システム論」『経済論集』第35巻第2号)では経済システムにかんするルーマンの論文のうち, “Die Wirtschaft der Gesellschaft als autopoietisches System”(以下 W. A. と略記)を主にとりあげたが, のちにこの論文にたいする批判とそれへの反論が同じ雑誌に掲載されたので¹⁾, これを話の糸口にするのが適当であろう。H. Mader によってなされた批判は, ルーマン独特のシステム観になじみのない者が抱く疑問を代弁しているようである。批判点は次の三つにまとめられる。

(1) ルーマンは「すべての社会^{ゲゼルシャフト}は経済問題を解かねばならず, 現代社会ではそれは^{アウステイフエレンツィーレン}自立²⁾化した²⁾経済システムの助けを得てなされる」(W. A., S. 308)と言っている

* 筆者は1986年3月末から一年間, 関西大学在外研究員として西ドイツ・ビーレフェルト大学のルーマン教授のもとで研究する機会を得た。本稿はその成果の一部であり, 『経済論集』第35巻第2号に発表した同タイトルの研究ノートの続篇をなす。Niklas Luhmann 教授をはじめ, Dr. Dirk Baecker, Frau Barbara Fischer などの方々からいただいた暖かい指導と助力にたいして厚く御礼申し上げたい。

1) もとの論文は *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 13, Heft 4, 1984 所収。批判論文は Helmut Mader, “Zu Luhmanns Aufsatz: „Die Wirtschaft der Gesellschaft als autopoietisches System“ in *ZfS* 4, 1984,” *ZfS* Jg. 14, Heft 4, 1985, S. 330-332. 反論は N. Luhmann, “Erwiderung auf H. Mader,” *ZfS* Jg. 14, Heft 4, 1985, S. 333-334.

2) ルーマンは *ausdifferenzieren* ということばを, システムの内部分化, 従ってもと

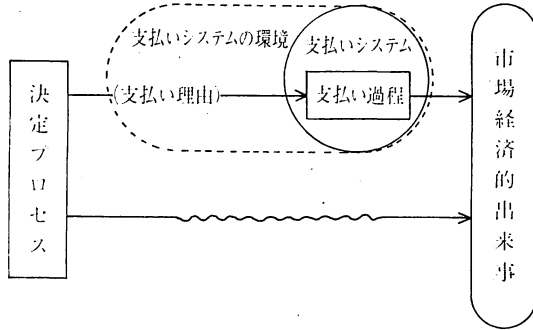
が、この言明によって彼は過去の社会ないし非現代社会を対象から外してしまっている。

(2) ルーマンは「社会の機能的分化のさい増大するあらゆる相互依存と因果的結合にもかかわらず、この経済システムは機能的自律性のもとでの自己産出的 (autopoietisch) な下位システムとして作動する。それは再帰的循環性によって閉じている。すなわちそれは支払いから成り立っており、この支払いは支払いにもとづいて可能となり、さらなる支払いを可能にするという関係にある」(W. A., S. 308) と言うが、これによって彼は経済的出来事が中央の計画決定にもとづいて生じるような社会（計画経済をもつ社会）を対象外におくことになる。市場経済に限ってみても、ルーマン流の自己産出的な経済システム像は必ずしもあてはまらない。なるほど消費財生産者・投資財生産者・原料供給者・労働者等の間の支払いの循環といった例にはそれがあてはまるにしても、経済的出来事を生み出す多くの決定は支払いを伴わない。たとえば商店主による後継者の決定、大企業の圧力に押された自治体の土地用途指定変更の決定、キャスティングボートを握る政党の核エネルギー禁止立法への賛成、強大国の決定機関による宇宙兵器製造許可等々。要するに市場経済的出来事を決めるのは支払い過程ではなく、決定プロセスなのである。支払いは決定プロセスのひとつの帰結であって、決定をもたらず側にはない。

(3) ルーマンは、支払いの閉じたシステムはシステムの環境に支払い理由を見いださざるをえないという意味で開いたシステムでもあると言うが、これは市場経済的出来事の全体をとらえるには不十分である。なぜなら市場経済的出来事を生み出す決定的要因は、支払いシステム内での支払い過程とそれのシステム外での理由づけではなく、支払いシステム外の決定プロセスだからである。ここでの批判のポイントは、図説するならルーマンが右図点線の内側の過程しか視野に入れていないというものである。

マーダーの批判にたいしてルーマンはごく手短かに答えているが、理解を容易にするためには多少ことばをくだいて紹介した方がよいと思われる。まず、ルーマンは支払いの自己産出的システムという言い方でマーダーのいう経済的出来事のすべてをとらえることができるかと主張しているのではなく、全体社会システムの中に経済と名付けうる部分システムの分化が認められる限りは、そこに支払いの自己産出的循環が存在するはずだと言って

のシステムの枠を保持したままの分化にたいして、分化した下位システムがもとのシステムから脱け出して独立するケース（その最も顕著なばあい *Autopoiesis* である）に用いている。現代社会を主として特徴づけるのはもちろん、単なる内部分化ではなくて、*Ausdifferenzierung* の方である。適訳が見当たらないので本稿では長岡克行氏の近訳にならって「自立化」としておく。



いるだけである。支払いの自己産出的循環が経済的出来事の動きをどの程度支配しているのかは時代により、政治体制によりさまざまでありうる。現代の発展した市場経済が進化的にみて自立化（Ausdifferenzierung）の段階にあり、支払いの^{オートポイエシス}自己産出を最も鮮明に示していることは確かであるが、そのことでルーマンが未開社会や計画経済社会を考察対象から除いているとみるのは早計である。未開社会は支払いの^{オートポイエシス}自己産出の観点からは進化的前段階として、計画経済社会は政治による支払いの^{オートポイエシス}自己産出の圧縮としてそれぞれ論じうるからである。

支払いと決定を区別する マーダーにたいしてルーマンは、支払い／非支払いはそれ自体、決定を含意しているとみる。なぜなら、支払い（非支払い）は非支払い（支払い）の否定（＝決定）があつてはじめて生じるものだからである。そして決定としての支払い／非支払いを伴うということが、ルーマンにとってある経過（Vorgang：マーダーの用語でいえば出来事 Geschehen）を経済的と呼びうるメルクマールなのである。もちろん支払い以外の決定、とりわけ政治的決定が経済的経過（出来事）を左右する事例はいくらでもあるし、時としてそれが経済の^{オートポイエシス}自己産出の危険につながることも忘れるべきではない。しかし、マーダーのように経済的出来事を決めるのは支払いではなく、それ以前の決定であるとするなら、出来事を経済的ならしめる別のメルクマールを探し出さねはならない。

社会進化の現代における到達点を自立化した各種の自己産出的システムの成立にみるルーマンは、そこを原点にして現実社会のさまざまな動きを解釈し³⁾、非現代社会にさかの

3) 環境問題を取りあげた *Ökologische Kommunikation: Kann die moderne Gesellschaft sich auf ökologische Gefährdungen einstellen?*, Westdeutscher Verlag 1986は最近の一例である。

ぼる。彼にとって自己産出は、社会とりわけ現代社会の社会学的觀察ないし記述の視角を決定する根本概念である。經濟にひきつけていうなら、自己産出的な經濟システムというとならば、經濟をホモ・エコノミカスの行為過程として描く經濟学的觀察(記述)に比すべき社会学的觀察(記述)のひとつの枠組なのである。このように考えると、マードーの批判は「支払い」が決定を含意するか否かの用語上の問題を除けば、ホモ・エコノミカスの仮定に反する人間行動の例があるといつて經濟理論を批判するのと本質的に似ている。この種の批判は代替的仮説を提示しない限り、強力なものとはなりえない。なぜなら、仮定に反する事例はしばしば当の仮定にもとづく觀察ないし記述(=理論)にとって予防接種の意味をもち、かえってそれらの觀察ないし記述を強固なものにするからである。事実ルーマンは自ら反例をあげて次のように言う。「二種の問題を考慮せねばならぬ。一方は經濟システムに強過ぎる外からの影響があつて經濟の全体社会的機能が縮減してしまうケース、他方はその逆に全体社会的プロセスが余りにも強く經濟計算に埋没してしまつて、政治の腐敗と社会的連帯の金錢化をもたらすケースである。經濟の自立化が支払い経過の自己産出にあるという命題はこのような現象によつて否定されるわけではない。まさにその逆で、上記命題はこうした現象の診断を可能にするのである」(Luhmann, "Erwiderung," S. 333), 「ドルが崩壊したとしよう。ドルの形で保有された貨幣はもはや他のいかなる通貨にも変えられない。……それは消え去るしかない。しかもこの消滅は支払いにかんする決定にもついていない。しかし、ここでも私は經濟的の自己産出の理論にたいする何の異議も出ないと考える。否、その逆で、こうした事実から読み取るべきは、……經濟の自己産出は危険を伴つたものであり、かつ自己産出がそれ自らを危うくするばあいがあるということなのである」("Erwiderung," S. 334)。

II. 經濟システムにおける価格

支払いの自己産出的システムというルーマンの經濟システム觀を受け入れたうえで、次にその中で価格がどのような役割を演じるのかみておこう。ルーマンの經濟關係の論文に価格はもちろん登場するが、それぞれの論文ごとにとりあげられる視点が少しずつ異なり、価格そのものをタイトルにした "Das sind Preise" (*Soziale Welt* 34, 1983) でも予期に反して價格のトータル・イメージを得るのは容易でない。ここでは散在する記述を筆者なりに綴り合わせてひとつのまとまつたイメージに近づけてみたい。

ルーマンは次のように言う。「支払いは非常に高度な情報喪失によつて特徴づけられている。貨幣支払いを通してみたすことのできる欲求や欲望はとりたてて説明されたり、根

拠つけられたりする必要はなく、また支払者は貨幣の由来を説明する必要もない。……この情報喪失が価格によって補償されるのだ。……価格はわれわれのばあい、コミュニケーション・プロセスにとつての情報としてとらえられねばならない。価格概念は……期待される貨幣支払い、しかも稀少な財の占有にたいする反対給付として期待される貨幣支払いにかんする情報である」(Luhmann, "Das sind Preise," S. 156)。そして「すべての有効になされた支払いは価格形成的に作用する。すなわちそれは、受取人の側に支払い可能性を再生するとともに、いかなる財・サービスにたいしていかなる支払いが考慮されるかということにかんする期待の形成を可能にする」(W. A., S. 313)。支払いの自己産出的システムである経済システムにおいては、支払人も受取人も財の移転ゆえに支払い、受け取るという以上の理由を相手や第三者から問われることはない。支払人は財をいくらかで買う用意があるか（つまり需要価格）に、受取人は財をいくらかで売る用意があるか（つまり供給価格）に彼らの取引の背後にあるあらゆる事情（環境要因）を集約して表出する。取引者相互間及び第三者との間でのコミュニケーションは何をいくらかでどれだけ買うあるいは売るかという情報（これがルーマンのいう価格情報）のやりとりのみである。こうしてみるとルーマンの経済システムのイメージは、需要曲線や供給曲線が主役となる経済学のモデルに似ているように思える。しかし、彼の関心は「市場均衡価格」を求めるところにはない。「(経済)システムの(社会学的)観察と分析にとつての適切な準拠点は、「均衡」の如き静態への回帰ではなく、モーメントを有する活動、すなわち支払い、の絶えざる再生垂である」("Das sind Preise," S. 155)。

ルーマンのシステム論の基礎には、システムはそれを取り巻く環境の複雑性に対処すべく、一定の自己複雑性を保持しなければならないという考え方がある。たとえば世の中で起こるさまざまな出来事（秩序づけられていない環境複雑性）に対処しうるように、法（システム）はそれなりに複雑なものとならざるをえない（秩序づけられたシステム複雑性）。経済システムのばあい、環境の複雑性に対処する役を一手に引き受けているのが価格情報なのであるから、その価格が均衡価格などといって固定ないし安定してはものの役に立たない。価格は絶えず変化することによって自ら複雑になり（ルーマンの用語では「複雑性の時間化」[Temporalisierung der Komplexität]⁴⁾）、環境の複雑性に対応できるようになるのである。今や、たまたま取引が成立した時の価格、言い換えると経済

4) 複雑性の時間化について手短かに、Luhmann, *Soziale Systeme*, Suhrkamp 1984, S. 76-79, また価格との関連は, "Das sind Preise," S. 157-158参照。

システム内のコミュニケーションが ja (諾) の答を含むばあいの 価格を 均衡価格と呼ぶのでなければ、他に市場均衡価格とか安定均衡価格といったものは存在しえない。

価格が環境の複雑性を経済システムの中にいわば写し取ることができるのは次のような条件のもとにおいてである。すなわち、

- (1) 環境の複雑性が財・サービスの稀少性という問題に転移されていること、
- (2) 貨幣量が人為的に制限され稀少化していること。

(2)の条件がみたされないばあいには、価格は財・サービスの稀少性を表示する能力を失ってしまう。また(1)の条件から、経済システムを稀少性の問題に転移されえない環境複雑性と連動させることはできない。それゆえたとえば、環境汚染といった問題も、環境の所有権が確定し稀少性が社会的に認知されない限り、経済システムの管轄外にある。これらの条件から、価格や貨幣さらには経済システムのもつ限界ないし弱点をあげることは容易であるが、ルーマンの主要な関心は価格(メカニズム)や経済システムのありようを批判し、将来を占い、代替案を提示するところではなく、とにもかくにも作動している経済システムの観察にウエイトが置かれている。そこで経済システムの作動(=支払い)にさいして価格の果たす積極的な役割をもう少しみてみよう⁵⁾。

価格は経済システムのさまざまな参加者にとって同じであるがゆえに異なる(The same is different.)という性質をもつ。たとえば、りんご1個50円の50円は数値的には誰がみても50円であり、それ以上でも以下でもない。しかし50円のもつ意味は人によって異なり、それゆえに取引すなわち支払いが生じるのである。言い換えると、価格は同じであることによって差異を目に見える操作可能なものにする働きをもっており、支払い、ひいては経済システムの自己産出は、価格のこの働きに支えられているといえるのである。では価格を通して取引や支払いを動機づける差異はどこから来るのであろうか。差異を生み出す条件は二つある。ひとつは欲求が不均等に分布していなければならないという条件(外的条件)で、これによって同じ価格の同じ財がたとえば人によって魅力的であったりなかったりの差がでてくる。もうひとつは、貨幣が経済システム内で不均等に分布していなければならないという条件(内的条件)で、これによって同じ価格がある人には高過ぎ、他の人には適当であるといった差が生まれる。いずれにせよ、経済システムは不均等を出発点とし、不均等を生み出すことによって自らの作動を再生産しうるのであり、均等

5) 次のパラグラフの記述はルーマンの草稿“*Ist der Markt ein System?*,” Bielefeld 1985にもとづく。

はシステムの死を意味する。経済システムにおける価格の役割は結局、欲求及び貨幣の不均衡分布を取り・支払いに結びつけることである。ルーマンの表現を借りれば、「価格は欲求を発見し、貨幣を発見する戦略である。」

以上でみてきたルーマンの価格観を整理・要約すると次のようになろう。すなわちルーマンの言う「価格」は、「支払うべき金額」と同義であり、それが取引を通じて実現した価格であるか否か、市場の需要と供給を均衡させる価格であるか否かといったよりこまかい性格づけはさしあたり問題にならない。かりにりんご1個50円と提示された——価格を提示するのは売手のみならず、買手自身でももちろんよい——とすれば、買手＝支払者は、稀少な財であるりんごの購入量に翻訳可能な範囲での自己の欲求ないし自己のかかわる環境複雑性と手持貨幣量をこの提示価格にてらして、買うか買わないか（支払いか非支払いか）を決定する。しかし、これだけでは支払いの自己産出^{オートポイエシス}すなわち経済システムが動き出す、あるいは動き続ける保証はない。なぜなら、すべての買手の買うか買わないかの決定が同じものであれば、いかなる価格をとっても需要は無限大（少なくとも稀少な財の供給を上回る）かゼロかのいずれかとなり、取引は成立しないからである。人によって欲求や手持貨幣量が異なる（不均衡分布）ゆえに、買手の決定にばらつきが生まれ、このことが取引の平和的遂行、従ってまた経済の自己産出的な運行を支えているのである。もっともここで、需要が供給を上回っても取引は成立しうるとの反論が出るかもしれない。がしかし、そのような取引は自己産出的な経済システム内の取引ないし支払いとはみなされない。いま話を簡単にするために買手A、Bがおり、50円のりんごがただ1個のみ売手Cによって供給されたとしよう。Aは50円を支払う用意があり、Bにはその意思がないならば、AはCに50円を払って平和裡にりんごを手にすることができる。Bは、50円という貨幣がCに移転されたのを見てAによるりんごの占有を黙認する。この取引（支払い）は貨幣のみによって媒介されており、経済システム内の取引である。一方、A、B共に50円を支払う用意があり、しかも50円はA、Bがそのりんご1個に支払う用意のある最高価格であったとしよう。このとき、売手Cが二人のうちAに売ったならば、BはAによるりんごの占有を貨幣の移転のみによって黙認できるであろうか。同じように支払う用意があったのに、なにゆえBではなくAにりんごが占有されなければならないのか。これを説明するには、この取引に介入した非貨幣的要因を持ち出すほかはない。いわく、CにとってAは顔見知りだったから、またいわく体力でBにまさるAが先着争いに勝ったから等々。貨幣の移転だけで支払い（＝取引）にともなう財の占有を第三者もしくは観察者に納得させることができるばあいには、その支払いは自己産出的な経済システムの作動となる。貨幣以外

の要因ないしメディアがからんでくるケースはルーマンの目から見ればおそらく、進化的前段階あるいは自己産出^{オートポイエシス}の危険としてとらえられるのであろう。

Ⅲ. 市場について

ルーマンの経済システム論の中で最も困難を感じるのは市場のイメージである。というのも、彼は市場にかんして考え方を少なくとも二回変えているからである。前稿でふれたように「社会システムとしての経済」(1970)⁶⁾では、市場は家計、企業とともに経済システムの内部分化した部分システムと考えられていたのにたいし、「自己産出的システムとしての経済」(1984)では「『市場』は境界にほかならない。それは生産と分配組織からみた消費の知覚(Wahrnehmung)である」(S. 321, 傍点春日)と変わっている。ところが最近の草稿(脚注5参照)によると、もっと徹底的な変更がみられる。

新しい考え方のエッセンスは、「市場は経済システムの参加システム⁷⁾の経済内的環境である。それは、それぞれの参加システムにとって異なると同時に、すべての参加システムにとって同じものでもある」と表現される。ここで重要なのは、システムを見るばあいの観察者の立場、すなわちシステム準拠(Systemreferenz)である。経済について言えば、それを外部からひとつの全体システム(Gesamtsystem)ととらえるなら、支払いから成る自己産出的なシステムとして描写できることはすでに述べたとおりであるが、経済の参加システムすなわち個々の家計や企業の視点からは、経済はそこから参加システム自体が自立化した特別の環境である。そして参加システムによるこの特別の環境の観察が市場と呼ばれる。言い換えると、市場を構成するのは、経済システムの参加システムによるいわば内からの経済システムの観察なのである。個々の参加システムは自己を含む経済システムを、自己をとりまく環境として観察する。観察対象はいずれにせよ経済システムの全体であり、どの参加システムにとっても同じであるが、観察内容は同じとは限らず、むしろ異っているのがふつうであろう(The same is different!)。

システム内からのシステムの観察という新しい市場イメージをもってルーマンは、稀少性のパラドックス(総量一定のもとでは、一者にとっての稀少性低下は不可避免的に他者に

6) "Wirtschaft als soziales System," in: *Soziologische Aufklärung* Bd. 1, 1970, S. 204-231.

7) 参加システム(partizipierendes System)とは、自己の固有のシステム法則性(たとえば家族形成とか生産組織とか)にもとづいて分化し、経済システムに相互浸透(Interpenetration)の形で参加するシステムのことでであるとされる。

とっての稀少性増大となる）、競争、価格、市場分化などのテーマを再定式化しようとするが、草稿段階でのそれらの議論は未だ十分固まったものではないとルーマン自身が断っており、筆者にとっても必ずしも理解が容易とはいえないので、今は立ち入らないことにしよう。当面注目すべきは、ルーマンの経済システム分析に、H. Maturana の自己産出^{オートポイエシス}と並んで新たに H. von Foerster の自己観察システム^{セルフオブザーヴィング}の考え方が取り入れられ、両者が接合されたという点である。すなわち、経済システムの社会学的分析は、一方でシステムを外から一個の自己産出的システムとして観察するとともに、他方でシステムの参加者（企業や家計）が経済システムを内側から自己の環境として観察するその観察、つまり市場の観察、を観察するのである。かくして市場はもはや単なる境界ではなくなり、まして家計や企業と並ぶ経済の部分システムではありえない。

ルーマンの市場イメージに関連して最後に、彼のもとで博士号を取得し、1986/7 年度「市場と公共性」ゼミをルーマンと共同で担当した Dirk Baecker のことにふれておこう。ベッカーは学位論文「市場経済における情報と危険」（Information und Risiko in der Marktwirtschaft, Dissertation, 1986）で、経済システムを構造の観点からではなく、出来事（Ereignisse）の観点から分析するという新しい接近法を唱え、市場を「経済システムに内部投影されたシステム作動の観察の相関物」として位置づけている。この論文が基本的にルーマンのシステム観を下敷にして展開されていることは容易にみてとれる。しかしそれと同時に、上記ゼミにおける討論の模様などを重ね合わせてみると、少なくとも市場や経済システムにかんする限り、ベッカーからルーマンへの逆方向の影響も無視できないように思われる。ベッカー論文は近く公刊されると聞くので、その折に改めて取り上げる機会をもちたいと筆者は考えている。

IV. 時代の診断としての経済システム論

ルーマンは、ドイツ人をしてさえ「我々が読むより速く書く」と嘆かせるほどの多作の人であり、公刊されたもの以外にも出番を待つ草稿がファイルボックスの中でひしめいている有様である。難解な文章と悪戦苦闘しているうちに、いつしかルーマンの解説と断片的な紹介で日が暮れることにもなりかねない。ときどきは著作の文面から目を離して深呼吸するほうがよさそうである。そういう意味で今まで見てきたルーマンの経済システム論から、彼の時代を見る視点といったものを探り出してさしあたりのしめくくりとしよう。

ここで筆者が注目するのは、ルーマンの現代社会像と、約30年前 Hans Freyer (1887-1969) によって描かれたそれとの間にみられる親縁性である。フライヤーと H. Schel-

sky, シェルスキーとルーマンという二組の人的つながり⁸⁾がこのことに関係しているのかどうかは定かでないが、フライヤーの『現代の理論』⁹⁾の冒頭にあげられた現代社会の四つの基本傾向（Trends）はルーマンの自己産出的社会システムのイメージにいわば体化されている。すなわち、フライヤーのいう第一の傾向、Machbarkeit der Sachenをとれば、これは技術の進歩につれて物が自然環境の与える条件とは独立に生み出される度合が強まることを指している。ミュンスター大学で晩年のフライヤーと直接対話の機会をもたれた城島国弘教授は「現代は物が物をつくる時代である」と意識されているが、ここでいう物（Sachen）が有形な対象に限られないことを考え合わせるなら、Machbarkeit der SachenはAutopoiesis des Systemsの原イメージと解しうるのではなかろうか。もちろん、社会システムをコミュニケーションの、経済システムを支払いの、それぞれ自己産出システムとして描くという発想に至るにはやや距離があることは認めねばならないが、たとえば経済システムにかんしてルーマンが「（経済）システムの環境依存性は、システムが基本的欲求の充足から奢侈欲求の充足へ、そしてさらに生産欲求の充足へと位置を変える程度に応じて、システム自体に依存するようになる」（W. A., S. 316）と述べているのは、欲求のMachbarkeitの指摘にほかならず、上記の距離を埋めるものとみることができよう。

第二の傾向 Organisierbarkeit der Arbeitは、高度に分業化・機械化された生産システムのもとで現われる。そこでは労働のにない手である人間は生産過程における主導権を失い、人間労働は機械生産に組み込まれた（organisierte）部分労働と化し、人々はもはや生産の全体を外から見渡すことができなくなる。これはいささか言いふるされたイメージであるが、システム論的にとらえるなら、環境（いまのばあい労働のにない手としての人間）から自立化したシステム（いまのばあい生産システム）の作動に参加する者はその限りでシステムを内からのみ観察しようとするルーマンの立場にまぎれもなくつながってくる。

多少敷衍していえば次のようになる。すなわち、自立化したシステムないし自己産出的システムは先にもふれたように環境の複雑性に対処すべく自らも複雑にならざるをえないが、そういうシステム複雑性のもとでシステムの作動に加わる者（生産システムのばあ

8) くわしくは、山本鎮雄『西ドイツ社会学の研究』恒星社厚生閣、1986、第二章参照。

9) *Theorie des gegenwärtigen Zeitalters*, Deutsche Verlags-Anstalt, 1955. フライヤーのこの著書については、城島国弘『経済秩序の世界像』東洋経済新報社、1967、第3章参照。

いでいえば労働力提供者である人間がその代表例となる）は、システム複雑性の全体、ましてそれが写し取る環境複雑性を抱え込む必要はなく、自らの近傍の複雑性を処理しさえすれば、さしあたり自立的ないし自己産出的に存続するシステムの中に安住しておれるのである。

現代社会は、フライヤー的なとらえ方ではシステム参加者がシステム全体を見渡そうとしても見渡せない社会ということになるが、むしろ全体を見渡さなくてもシステムが動く（と人々が信じている）ので人々はあえて見渡そうとしないし、見渡さないことによってシステムの矛盾が隠され、それがシステムの自立的・自己産出的存続を助けているとみるべきではなかろうか。さまざまな論述から判断する限りルーマンの理解もこのほうに近い。経済学の描くホモ・エコノミカスはまさに、自立化したシステムとしての経済の中で全体を見渡す目を「見えざる手」に譲ってしまった人間にほかならない。経済にとどまる必要はない。そもそもホモ・サピエンスとは、地球という自己産出システムの中で全体を見渡すことなくやってきた結果、システムを完全な破壊に導きつつある、そのようなシステム参加者なのである。

フライヤーのあげる第三の傾向 *Zivilisierbarkeit des Menschen* は意識すれば文明の大衆化、さらには人間の没個性化とよべるものである。そこでは社会の行動規範や制度がすべての人々に無差別に適用され、人々はそれを束縛と感じないばかりか、むしろ喜んでそれに従う。他人と同じようにふるまっていれば心は安らかである。あえてひとと違ったふるまいをして自らを苦しめる必要がどこにあるのか。ふたたび自己産出システムをとろう。このシステムにおいて参加者に期待されているのは、流れ作業の組立工の如く、システムの作動に継続的につき従うことである。経済システムであれば支払いという作動をになうことで参加者の責任は果たされる。彼らは一律に支払いにかんする社会的規範や制度のもとにおかれるが、それは大した苦痛ではない。隣の人と同じようにやりさえすればよいのだから。かくして自己産出的社会システムはその特性のひとつとして文明の大衆化を含みもっているといえるのである。

さて、以上三つのトレンドの行きつく先には何が待っているのだろうか。人間をとりまく環境のすべてが人間の手によって作り出せる（*machbar*）ようになり、すべての労働が完全に分業組織に組み込まれ、さらにはすべての人間が社会的規範や制度に合わせて自らを徹底的に没個性化・大衆化してしまったような世界、そこでは歴史が完結するとフライヤーはいう。そして「進歩が、たんなる理念やスローガンやまた習慣化した時代の思考様式ではなく、現実の出来事のありよう（*Modus*）となり」、「計画可能なもの、および実

際すでに計画されたものの占める領域がますます拡大しつつある」こんにち、この人類の歴史の完結可能性（Vollendbarkeit der Geschichte）という第四のトレンドはすでに視界の中にはいつてきているのである（Freyer, *op. cit.*, S. 77-78）。このようにフライヤーが歴史の完結をトレンドの収束点として描いたのにたいし、ルーマンが自己産出システムとして描くのは、トレンドが収束し切ったあとのいわば無歴史期にはいった社会である。経済についてルーマンはこう言っていた。すなわち「これ（経済システムの自己産出的作動）には何らの目的も結びついていない。なぜならもし目的があるとすると、その達成によって経済が自らの作動を停止するような終局状態がはっきりしているということになるだろうからである」（W. A., S. 315）。もちろん個別的な作動（経済のばあい支払い）を完結させるものとして、システム内ではさまざまな目的設定と達成がありうるが、それらはシステム全体にとっての目的ではなく、たんにエピソードを構成するだけである。一方ルーマンは社会システムやその部分システムの進化（Evolution）を強調する。彼によれば進化とは、計画せざる構造変化を通してのシステム複雑性の構築、つまりシステムの環境複雑性処理能力の向上であり、進む方向が予め決まっている進歩とははっきり区別される。

こんにちの経済は国境を越えて広がる支払いの限りない連鎖を含んでいる。経済の作動の時間的コースはもはや誰にも予測できないし、ましてやそれを政治的に制御しようと信じる者などいない。中央銀行をも含めて経済の自己産出的作動に参加する者は、システムの全体を外から眺めることができないまま、システムの内側から自己の近傍を観察し、唯一の手段たる支払いによって出来事に対処する以外にない。そういう中でたとえば情報処理面で革新といったシステムの進化は認められるが、これはシステムの進歩ではない。もし進歩ということばを使うなら、「システム内に生起するエピソードの観点から」と限定をつけるべきであろう。自己産出システムとしての経済には今や進歩も計画もありえない。経済にかんする限り、フライヤーの意味で歴史は完結してしまっただのである。この先あるのは経済システムのエピソードの歴史である。

ルーマンが現代社会を語るとき、フライヤーのようなペシミスティックな響きは聞えてこない。彼はつとめてシステムの観察者としての立場を守り、むしろ観察のための道具をあれこれ案出するほうに重きをおいているかのようである。がしかし、道具の豊富さや新奇さにのみ目を奪われてはならないだろう。われわれにとって肝心なのは、それらの道具（未完成のものもあるが）を使って彼の目がとらえた社会像を読み取ること、つまり観察の観察である。